



二葉だより

令和4年4月28日 NO.2
墨田区立二葉小学校
校長 山崎 隆



梅檀とヒトツバタゴ

校長 山崎 隆

日本に自生する植物は、およそ7000種にも及ぶと言われています。そのうちの1500種以上に学名を付けたのが「日本の植物学者の父」と呼ばれる牧野富太郎(まきの とみたろう)博士です。身近なものでは、ケヤキやキンモクセイ、クチナシなどを名付けています。高知県に生まれ、全国を歩いてほぼ独学で植物の知識を身に付け、やがて東京大学植物学教室の助手や講師となり、1927年に理学博士の学位を受けました。植物学者や植物愛好家に読み継がれている「牧野日本植物図鑑」には、すぐれた観察眼とネズミの毛を3本だけ束ねた極細の筆で、美しく精密な植物画が描かれています。ちなみに、2023年の朝ドラは、牧野博士をモデルとする植物学者を俳優の神木隆之介さんが演じる予定だそうです。

前置きが長くなりましたが、二葉小学校の校章には植物の葉が描かれています。これは3代目の校章で、昭和3年に当時の図工専科の山中先生が梅檀(せんだん)の葉に「二葉」の文字をデザインしたものだそうです。明治38年に開校した本校は、当時の校舎が建てられた南二葉町の地名から「東京市二葉尋常小学校」と命名されました。そして「二葉」という名前から、「梅檀は二葉(双葉)より芳(かんば)し」(大成する人は幼い頃から優れたところがあるという意味)のことわざを校章に込めて教育を進めてきました。現在も、梅檀の木が正面玄関の向かって右側と校庭の二葉アスレの後ろに根を張り、子供たちの登校の様子や元気いっぱい遊ぶ姿を見守っています。また、3階の学校図書館にも「せんだん」の名称が付けられ、学校図書館司書や学校図書館ボランティアのみなさんのご協力により、子供たちの読書活動が充実しています。

校庭で子供たちを見守っている二葉小学校のシンボルはもうひとつあります。それは、鉄棒の後ろに伸びる「ヒトツバタゴ」(通称「ナンジャモンジャの木」)です。昭和58年に墨田区より「フタバの木」としていただき、校庭に植樹されました。毎年5月頃に白い花を咲かせるモクセイ科の植物です。こちらは、子供たち自身が生活の様子や学習の様子を記録して中学校・高校まで引き継いでいく「キャリア・パスポート」の名称として付けられています。また、現在はコロナ禍で休止中ですが、PTAや地域の方々にお力添えいただいている「ヒトツバタ子ひろば」もその名にちなんだものです。

梅檀とヒトツバタゴの2つの木は二葉小学校の歴史の中で大切にされ、学校のシンボルとして子供たちの生活に根付いています。これから先もずっと二葉小学校の子供たちを見守り続けてくれることでしょう。子供たちにとって梅檀のことわざの意味は少し難しいかもしれません。ヒトツバタゴ(ナンジャモンジャの木)が「フタバの木」であることの歴史はピンとこないかもしれません。しかし、我々大人は、梅檀とヒトツバタゴに込められた意味も含めて二葉小学校の歴史と伝統をしっかりと理解し、先人の思いや願いを受け継ぎながら子供たちの教育を進めていかなければならないと決意を新たにしています。時代は移り変わろうとも、コロナ禍であろうとも、今年度開校117年を迎える二葉小学校の子供たちの生き生きとした学校生活に向けて、引き続きご理解とご協力をお願いします。